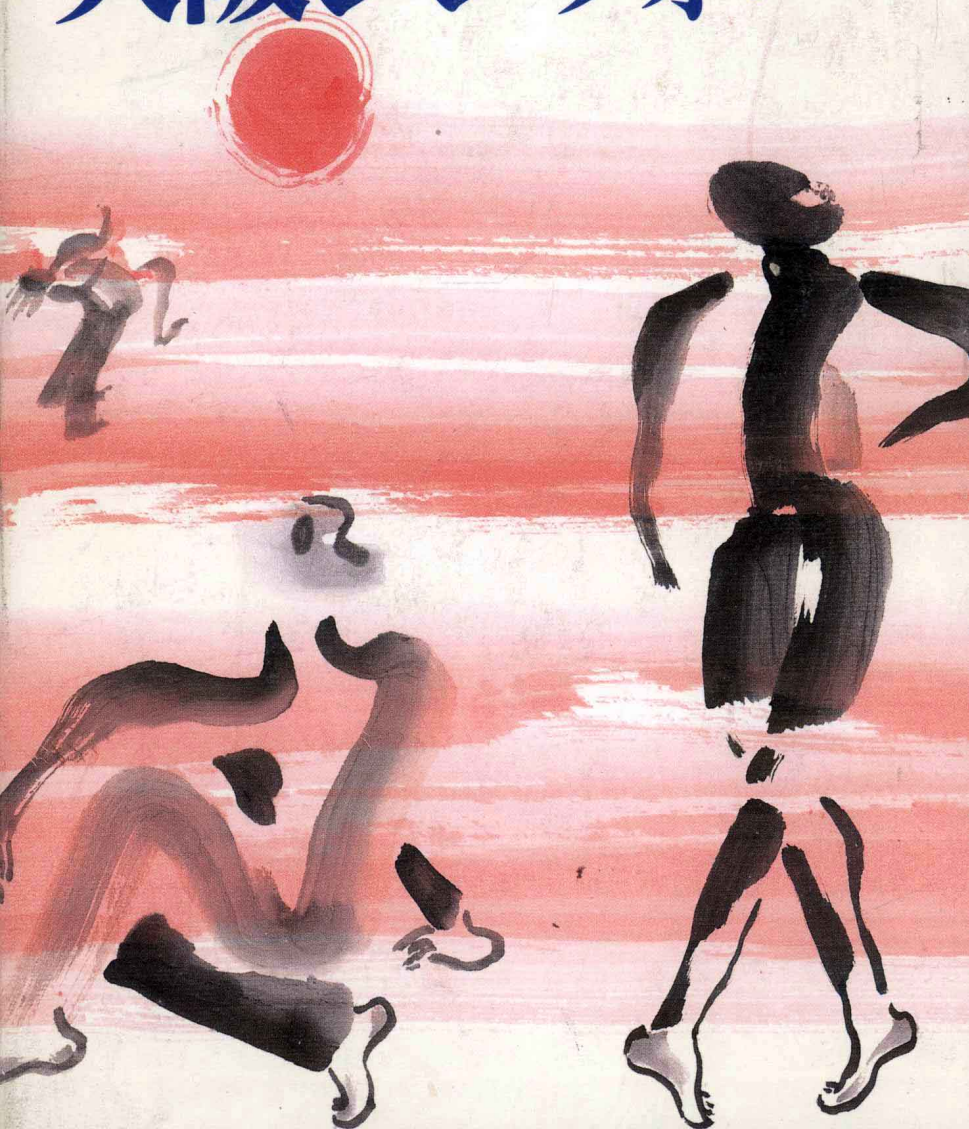
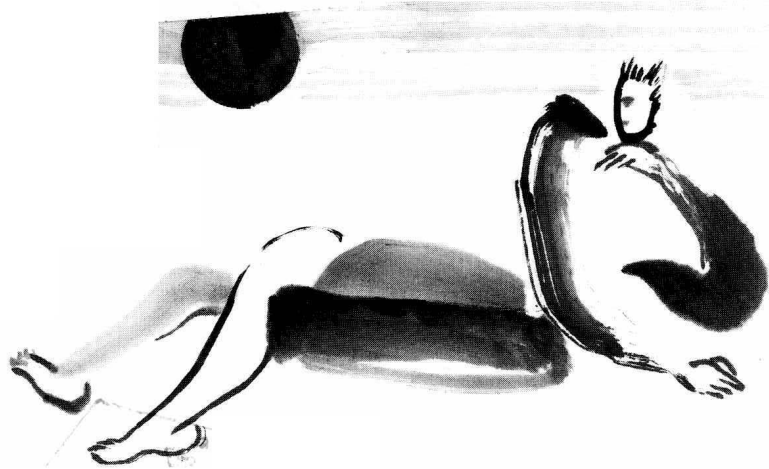


小田 実

大阪シンフォニー





小田 実

大阪シンフォニー

おおさか
大阪シンフォニー

一九九七年 二月三〇日初版印刷
一九九七年 三月 七日初版発行

著 者 小田 実
おだ まこと

発行者 嶋中 鵬二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二-八-七

電話 販売部 (〇三)三五六三一四三一

編集部 (〇三)三五六三一三六六六

振替 〇〇一二〇一四一三四

印刷・製本 大日本印刷

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

©1997 CHUOKORON-SHA, INC./Makoto Oda

Printed in Japan

ISBN4-12-002663-9 C0093

大阪シンフォニー
目次

第一章 原野の落日

莊重に、また、猥雑に……………7

第二章 月光月影

華麗に、また、強靱に……………49

第三章 おれとおまえの闇市

きわめて現實的に、また、幻想的に……………95

第四章 ぬばたまの闇のなかのケモノ道

ケモノのごとくすばやく、また、重厚に……………137

第五章 すべて世はダイジョウビ

にぎやかに、また、さびしく……………169

第六楽章 あの世界とこの世

深遠に、また、軽薄に……………215

第七楽章 白昼堂々

剛胆に、また、細心に……………265

第八楽章 原野の祝宴

美味、ケンランに……………309

第九楽章 風の音のたわむれ

あくまで軽快に……………353

あとがき……………416

大阪シンフォニー

装幀・章扉画
玄
順恵

第二章 原野の落日

莊重に、また、猥雑に



一

あのころは、朝、太陽はまっすぐに東方の山脈から昇り、夕刻、まっすぐに西方の海に落ちて行った。

あのころ、というのは、いくさはすんでいたが、大阪の大半がまだ焼野原だったころのことだ。大阪の東方につらなつて見えるのは生駒山脈だから、朝、そこから太陽が昇るのは当然のことだが、西方、海への落日が見えたのは、市の中心部がただの赤茶けた瓦礫の面積に化していたからである。私はあのころ夕暮になるとよくわが家からかなりな距離を歩いてイクダマ神社のお宮は焼けてそこだけ焼け残った粗末な木造の展望台に上ったものだが、それはそこからそのあたりは大昔は海だったといういわれにふさわしく大阪の中心部の焼跡が見わたすかぎりひろがっているのが見えたからだだけではなかった。そのところどころに空襲でなかに火が入って今はガラン洞になった建物が間抜けなかつこうでたつだけの、ただの赤茶けた瓦礫の面積のむこうにまぎれもなくキラリと光つて海が見え、さらには海にむかつて真赤な太陽が落下する壮大な落日の光景が眺められたからだ。

もちろん、私がこう言うのと、「壮大」というようなことばはそれこそ壮大すぎて、スモッグや

ら二酸化炭素やらに大気が充滿した大阪の落日には誇大すぎるとうるさいことを言い出す人がいるにちがいない。しかし、あのころ私がイクダマ神社の展望台から見た落日はまぎれもなく満州の原野さながらの壮大な落日だった。

ここでまず言っておきたいのは、一望赤茶けた瓦礫の面積と化した大阪の中心部はまさに原野であつたことだ。ずっと以前、私がまだ小学生だつたころに、私は親類から、満州の開拓民の子供の生活を描いた絵本をもらつていた。そこに原野の落日の光景が出て来たのだが、私がイクダマ神社の展望台でまざまざと思ひ出していたのはその場面だ。まず満州の原野に落ちるのは真赤に燃え上る太陽だが、あのころの大阪は工場もなければ、車もろくに走っていない大阪だったから、空はあくまで澄みわたつて、落日の太陽が燃え上る真紅の円球となつて落下して行くのに適していた。そして、下界はただの焼跡、赤茶けた瓦礫の堆積。奇妙なことにいくさのあいだは生えていなかったが、そう記憶するが、いくさが日本が徹底して負けて終るとともにいつのまにかところによつては大人の背丈よりも高い雑草に一面に覆われた文字通りの原野になった。ペンペン草か、それともその一種だったにちがいないが、これが始末に負えなかったのは、引っこ抜こうとしてもこちらの手が切れてしまうぐらい茎も強靱なら根も頑丈にできていたことだ。

さて、このただの赤茶けた瓦礫の面積でなかったなら、ペンペン草の草原である原野に燃え上る真紅の円球が落下して行くのだ。それが原野の落日でなくて何んであろう。はじめは動いていのか動いていないのか判らぬぐらいの緩慢な動きを示していた太陽が下降の動きを急速に示し始めると同時に真赤に燃え上り始めて、あとはまさに一瀉千里、赤いクレヨンでぐいぐいと一直線をタテに引くようにしてわが大阪原野のはての海めがけて落ちて行つた。そのあとに来るのは

西方の空の華麗なる燃え上りである。あれはまさに絵本に出て来た満州の原野の夕空の燃え上がりさながらであった。絵本には粗末な綿入れを着た開拓民の稚い兄妹が頬を落日の照り返しで真赤に染めながら原野の夕空の燃え上りを見ている光景の絵が出ていたが、イクダマ神社の展望台の上で落日を眺めながら私はいつもその絵を思い出していた。

折しもときは冬。さえぎる物とてない大阪原野には風は好きだけ吹き、もうそこにはかつての「煙の都」の煤煙もスモッグもまして車の排気ガスも、それら一切の暖房効果をもつ大気汚染はなかったから、原野の空気は遠慮会釈なくただ冷えた。大阪原野の落日が満州の原野の落日を思い起こさせたのにも、落日後の情け容赦のない寒さ、冷え込みが一役買っていたが、もうひとつ言っておきたいのは、いつときの夕空の燃え上りのあと、ろくに灯火もついていない原野のことで、たちまち一面に暗くなつてすぐ夜が来たことだ。夜はまわり道しないで原野にまっすぐにやつて来た。深い、どうしようもなく深い夜だ。

二

私がマルコ・ポーロ——その名であるところひそかに私が呼んでいた私より一歳年上の少年にはじめて出会ったのも、イクダマ神社の展望台で原野の落日を見たあとのことだ。落日を見たあと、私は暗くなりかけた近くの道路で木煉瓦拾いをやっていた、いや、あれは木煉瓦拾いというようになまやさしいものではなかった。まさしく木煉瓦の盗掘だった。

今はもうそんな道路はどこにもなくなつたが、あのころの大阪には木煉瓦を敷きつめた道路がよくあつた。空襲で火が入つて半焦げになつた木煉瓦は火が付きやすい上に全体にコールドタルが滲み込んでいたのでけつこうな燃料になる。フロ屋で抜け目のないのが道路から掘り出して来たのをバケツ一杯いくらで買い出していた。私もときどきバケツを下げて原野のあちこちの道路を盗掘してまわつた。

もちろん、ときどきお巡りにつかまつた。相手と状況に応じて、「わしのお父ちゃんは今空襲で死んでしもうたんや。お母ちゃんは病気で寝たきりや」と泣いてみせることもあれば、「お巡りはん、今夜のメシ代貸してエな。このバケツの木煉瓦で稼ごうと思うていたんやないか」と恩に着せたかたちで憐れっぽく、また居丈高にせがんでもみせた。この出まかせのセリフを緩急自在にあやつつてみせる技術はあきらかにマルコ・ポーロに出会つたあとで彼からせしめたものであつたが、私が彼にはじめて会つたのも、そのイクダマ神社近くの道路で盗掘をやつてのけている最中のことだ。私がいつものように私の特製の竹べらで半焦げの木煉瓦を懸命に掘り起こしていると、私のまえに不意に知らぬ少年が立ちはだかつた。

その少年がマルコ・ポーロだつたのだが、まえに立ちはだかつたと言つても私はうつむいて作業をしている最中だつたから、私は彼の全身を認めたのでない。私が見たのは、まず彼の手垢で黒光りのしたカーキ色の半ズボンと、そこからニョッキリと突き出た二本の長い脚だつた。

その脚は長く、たくましかつた。原野の烈しい太陽光線にこんがり日焼けして狐色であつた。まばらに毛が生えていた。かたちがよかつた。細いというのでは決してないが、なにしろむやみと長いものだから、全体としては細長い印象を残した。それでいてたくましい。一言にして言え

ば、スマートであつた。いくさが終つてまだ四月かそこらの大阪の焼跡ではそうしたスマートさは稀れであり、ドキリとさせるぐらい目についた。思春期の少女で感受性の鋭いのなら、そのときにわかひざまずいて、その二本の脚に頬を押し当てたかも知れない。そんな図柄の絵をどこかで見たことがあるような気がそのとき私にはしたのだが、それは彼の脚のスマートさが私にそう思惟せただけのことであつたかも知れない。実際、彼の両脚は寒風が吹きすさぶ原野でべつにさびいほもつくらず、それほど魅力と威厳に落ちて、すつくと立っていた。

しかし、私がたとえその少女であつたとしても、彼の両脚に接吻しているいとまはなかつた。「おまはん、どつから来た。」

彼はやにわに叫び、私は頭を上げざるを得なかつた。

立ち上つてみると、少年は私よりはるかに長身だつた。また、確実に一、二歳は年長に見えた。一見して、そのころの大阪に多かつた浮浪児、あるいは、それに類した人生を送っているにちがいない少年に見えた。眼は鋭い。私はそれまでもそれから、あんなに眼つきのわるい人間に出会つたことはない。

私は言つた。

「どつから来たつて、おれの勝手やないか。そこ、どいてくれ。商売の邪魔や。」
少年は私の両腕をつかんだ。

「やる気かね。やる気やつたら、やつてもええが……」

彼はその鋭い眼で私をにらみつけた。私も負けていなかつた。私もせいっぱいきつい眼でにらみ返した。うんざりするほど長い時間が経つたが、そのあいだ彼はまばたきひとつしないでい

た。私も無理して眼をみはっていた。

「しかし……」

少年は大人びた口をきいた。

「殴りあつても、わいはつまらんとするな。なんせ、今は日本も文化国家や、暴力はいかん。」

少年はまるでついこのあいだまで私たち生徒に何かと言つては「たるんどる。そんなことで戦争に勝てるか」とせいだいビンタをくれていたくせに、今は口を開けば「文化国家」やら「民主主義」やらのお説教をたれる私の学校の教師のような口をきいたが、それでいて彼の私をつかむ手の力は一向にゆるもうとしない。それどころか、かえつていつそう彼は手に力を入れた。

「それにな、わいはおまはんに話があるんや。取引やな。……それ、いったい、おまはん、いくらでフロ屋に売りつけるつもりや。」

「何をや。」

私は白ばくれた。

「これや。……判らんか、これやがな。」

少年はその細長いスマートな脚で、私の足もとのぶかつこうなバケツをスマートに蹴った。

「木煉瓦の話か。……」

私がようやく言うと、少年は横柄にうなずいた。私はその横柄さに腹を立てた。

「なんぼでもええやないか。おまえの知ったことか。」

少年はニヤリとした。

「まあまあ、そう怒りなさんな。怒ると、ナンバ粉のゲップとオナラが出る。わいは取引をやり